

2020.10.11 (日) マタイ23:5~12

23:5 彼らがしている行いはすべて人に見せるためです。彼らは聖句を入れる小箱を大きくしたり、衣の房を長くしたりするのです。

23:6 宴会では上座を、会堂では上席を好み、

23:7 広場であいさつされること、人々から先生と呼ばれることが好きです。

23:8 しかし、あなたがたは先生と呼ばれてはいけません。あなたがたの教師はただ一人で、あなたがたはみな兄弟だからです。

23:9 あなたがたは地上で、だれかを自分たちの父と呼んではいけません。あなたがたの父はただ一人、天におられる父だけです。

23:10 また、師と呼ばれてはいけません。あなたがたの師はただ一人、キリストだけです。

23:11 あなたがたのうちで一番偉い者は皆に仕える者になりなさい。

23:12 だれでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。

<説教>

主イエス・キリストは、「律法学者たちのようにはなく、権威ある者として教えられ」(マタイ7:29)ました。

それは“山上の説教”のときだけでなく、その前から、そしてその後も、ずっと変わらずそうでした。

イエスは偽善者たちが人に見せるために、人にほめてもらうために善行をし、施しをし、祈り、断食をしていることを見抜いておられ、指摘しておられました(6章)。

また、口先では神を敬うが心は神から遠く離れている偽善者たち(パリサイ人や律法学者たち)の心を知っておられました(15章)。

今やパリサイ人や律法学者たちのイエスに逆らいイエスを殺そうという態度が決定的となったこのときも、変わらずイエスは生ける神の子、キリスト、主としての権威をもってパリサイ人や律法学者たちの心を見抜き、群衆と弟子たちに教えておられます。

マルコの福音書によれば、それまで神殿でイエスがパリサイ人や律法学者たちにお語りになっていたことを「大勢の群衆が…喜んで聞いていた」(マルコ12:37より)のでした。

イエスがパリサイ人や律法学者たちを“言い負かした”のを面白がって聞いていたようです。

イエスの弟子たちもきっとそうだったのでしょう。

しかし群衆と弟子たちは他人事(ひとごと)としてではなく、自分自身の問題として聞かなければなりませんでした。

そしてイエスの権威にひれ伏し、イエスを主、生ける神の子キリストと告白し信頼して、イエスに聞き、イエスに学び、イエスに従って行かなければなりませんでした。

私たちも同じです。

23:2からのイエスのお言葉も、そういうイエスのお言葉です。

今日は先主日に学んだところの続きからです。

23:5 彼らがしている行いはすべて人に見せるためです。彼らは聖句を入れる小箱を大きくしたり、衣の房を長くしたりするのです。

23:6 宴会では上座を、会堂では上席を好み、

23:7 広場であいさつされること、人々から先生と呼ばれることが好きです。

「彼らがしている行い」とは、「まねてはいけません。」とイエスが言われた「彼らの行い」(3)と同じです。

律法学者やパリサイ人たちは実に熱心に大きな努力をして宗教的に行いや善行に励んでいました。

しかしその「すべて」、一つ残らず「人に見せるため」でした。

その代表的な行いが「聖句を入れる小箱を大きく」すること、「衣の房を長く」することでした。

「聖句を入れる小箱」とは「聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。」(申命記 6:4)などの律法が書かれた紙を入れた箱で、「これをするしとして自分の手に結び付け、記章として額の上に置きなさい。」(同 6:8)に従って左腕と額にくくりつけました。

「衣の房」は、「イスラエルの子らに告げて、彼らが代々にわたり、衣服の裾の四隅に房を作り、その隅の房に青いひもを付けるように言え。その房はあなたがたのためであって、あなたがたがそれを見て、主のすべての命令を思い起こしてそれを行うためであり、…」(民数記 15:38,39 より)とのみことばによるものでした。

マタイ 9:20 にもあったように、イエスもこういう衣を着ておられましたから、「衣の房」それ自体が悪いものではありませんでした。

ただ、律法学者やパリサイ人がそれを「長く」し、「聖句を入れる小箱を大きく」したのは、それを見て主のすべての命令を思い起こしてそれを行うためではありませんでした。

彼らの目的は、人々から「さすがは偉い先生方だ。信仰深く、律法を熱心に守り、よく祈り、よく神に仕えておられる。立派なものだ。」と褒められ、尊敬と賞賛の思いとまなざしをもって見てもらうことでした。

彼らの思い、心の目は神にでは全然なく、ひたすら人間に向かっていたのです。

そんな涙ぐましい(?) 努力の甲斐もあり、「宴会では上座を、会堂では上席を」得ること、「広場であいさつされること、人々から先生と呼ばれること」に成功していました。

なお、「先生」と訳された言葉(8 節も)はヘブル語の発音のまま「ラビ」ですが、これは「ラブ」(偉大な)という言葉から派生して「ラビー」(私の偉大な方)、即ち「先生」ということになります。

だから「先生(ラビ)と呼ばれる」というのは「偉大な人だ、偉い人だ」と言ってもらっているということになります。

「好き、好む」と訳されている言葉は「愛する(フィレオー)」という言葉ですから、彼らがどれほど「宴会の上座」「会堂の上席」「広場であいさつされること」「人々から先生とよばれること」が「大好き(新改訳)」だったが分かります。

彼らが愛し大好きだったのは神でもなく、隣人でもなく、ただ自分だけだったということにもなるでしょう。

「しかし、あなたがたは」、すなわち「なおもわたしの教えを聞くようにわたしのもとに召されているあなたがたは」とイエスは言われます。

23:8 しかし、あなたがたは先生と呼ばれてはいけません。あなたがたの教師はただ一人で、あなたがたはみな兄弟だからです。

23:9 あなたがたは地上で、だれかを自分たちの父と呼んではいけません。あなたがたの父はただ一人、天におられる父だけです。

23:10 また、師と呼ばれてはいけません。あなたがたの師はただ一人、キリストだけです。

「教師」とここで訳されている言葉（ディダスカロス）は「ラビ」をギリシア語に言い換えたもので、やっぱり「先生」のことです（cf.ヨハネ 1:38）。

だからイエスは「あなたがたにとって偉大な人、ラビ（先生）はただ一人」と言われたのです。

「あなたがたはみな兄弟」なのは、「ただ一人、天におられる父だけ」が「あなたがたの父」だからです。

そして「あなたがたの師はただ一人、キリストだけです。」（10）と 8 節を合わせれば、「あなたがたの先生、教師、師はただ一人、キリストだけです。」となります。

あなたがたはただ一人、天におられる父だけを父とし、ただ一人、キリストだけを偉大な先生・導き手として育てられる「兄弟」だ、とイエスは言われたのです。

もちろん「先生」「父」という呼び名それ自体が悪いものではありません。

この世でそういう“肉の（？）”立場にある人も数え切れないほどいるわけです。

しかしそういう立場というものは、本質的には神から与えられたもの、任命されたもの、そう召されたものです。

ですから何よりも召してくださった神の前に、神に対して責任があるし、神の方を向いてその責任を果たさなければなりません。

さてそれで、「先生」「父」という呼び名それ自体が問題なのではなくて、人からそう呼ばれたい、そう呼ばれて嬉しい、そう呼ばれて何か自分が偉大になったような気になり、自分の好きなように権威を乱用・悪用して人を支配したいというような虚栄心、名誉欲、支配欲、権力欲、権威主義が問題であり、「いけません」と言われているのです。

また、反対にと言いますか、だれか人間を神のように、キリストのように、神と並べ、キリストと並べて「父」、「先生」と崇め奉り、そういう人間の権威に依り頼むこと、ただ言われるままに思考停止して従う（盲従）のも同じようにだめです。

考えて見れば、そうやって誰か目に見える偉大な人、偉い人、「先生」「父」なる人間を、自分がいざというときに（または普段からでも）神のように、または神として仰ぎ、頼るために、持っていたい、そうすれば安全安心だというのが人間の罪ゆえの弱さというものでしょう。

それが家族の中の誰かだったり、学校や職場の先輩だったり友達だったり、時には何か顔が利く偉い人・権力者だったりするわけです。

律法学者やパリサイ人が宗教的な立派な多くのわざを行っていたことは、ユダヤ人民衆にとっては安心の元、助け、救いのように思われていたのもありましょう。

しかしイエスはそれは人々にとっては負いきれずやがて押しつぶされることになる重荷でしかなく、全然助けになっていない、ゆえにまねてはならないと言われたのでした。

そしてもちろん、ご自分に習い、学び、つき従うべきだと言われるのです。

23:11 あなたがたのうちで一番偉い者は皆に仕える者になりなさい。

23:12 だれでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。

これは本来「一番偉い者」であられるイエス・キリストご自身がまず「皆に仕える者にな」られたからこそのお言葉です。

イエスは「神の御姿であられるのに、…ご自分をむなしくしてしもべの姿を取り」（ピリピ 2:6-7 より）、「仕える者」となられました。

私たちの罪という重荷を負ってください、十字架で死んでくださいました（律法学者やパリサイ人等によって異邦人に渡されて殺されるという形で）。

しかし神は「イエスを、よみがえらせました。神は…このイエスを導き手、また救い主として、ご自分の右に上げられました。」（使徒 5:20-21 より）

このようにして「自分を低くする者は高くされます」という真理をご自分の身においてまず実現され、証明されたのです。

ならばイエスに信頼し、イエスにつき従う者もイエスの身に行われたのと同じようにしていただけるのですから、イエスに倣って「皆に仕える者にな」るほかありません。

「自分を高くする者は低くされ」とは、高ぶる者に対する神のさばきであり、そのときまさにイエスが律法学者、パリサイ人に向かって宣告なさったことです。

「だれでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます」とはもちろん神が権威をもってそうなさるのです。

ですから人々は、私たちは「だれでも」、この世の権威・権力者も、このただ一人の天の父なる神、ただ一人の先生であられるキリスト・イエスの権威の前にひれ伏さなくてはなりません。

ですからイエスが言われるのは単に上席を譲り合うような謙遜の勧めではありません。

ましてや「人に見せるため」に謙遜ぶりを競い合って、俺の方があの人よりもへりくだったぞと内心誇るような、また謙遜ですと人から褒めてもらって喜ぶような偽善とは全くちがいます。

「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える。」（ヤコブ 4:6 より）

「主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださいます。」（同 4:10）

「ですから、あなたがたは神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神は、ちょうど良い時に、あなたがたを高く上げてくださいます。」（I ペテロ 5:6）

こう言われる神の権威の前での、神への信頼に基づいた、まず人にではなく神に向かって、神にひれ伏すへりくだりをイエスは私たちに求めておられます。

まず主イエス・キリストのしもべとして「皆に仕える者」になるように主は私たちに呼びかけ、召して下さっているのです。